



「地域共生のいえ」とは、オーナー自らの意思により家・建物を地域の公益的かつ営利を目的としないまちづくり活動の場として地域に役立てる取り組みです。

地域共生のいえ かわら版

第 8 号

発行月：平成28年8月31日

発行：一般財団法人世田谷トラストまちづくり

ふ れ る ・ つ な が る ・ ひ ろ が る

今号でとりあげる“いえ” シェア奥沢 1
ぬくぬくハウス 4

読書空間みかも 2
在林館 5
椎の木 3
あばら屋 春夏 6



世田谷のいえ
かわら版
第 8 号

それぞれのいえは それぞれの次なる時間へ

1 シェア奥沢 共通の関心事から生まれる交流の場



堀内さん

デイサロンが始まりました！

2014 年にオープンし、共通の関心のテーマで集まる人達が、場や時間、体験をシェアする場になっているシェア奥沢。自由が丘の駅から歩いて 5 分ほどの閑静な住宅街の中に佇んでいる。

玄関を上がり、奥に入ると笑い声と共に歌が聞こえてくる。
「しよ、しよ、しょうじょうじ」
「しょうじょうじってどこにあるか知ってる？」
「あら、私昔行ったわ」
「私はぞんじませーん」



歌はなかなか進まないが、笑いが絶えない。今年 5 月から始まったデイサービスのひとコマだ。住民主体（NP0 や住民団体）でデイサービスを提供できるようになり、地域ぐるみで介護予防をし、地域でより長く生活できるように、という世田谷区の新しい仕組み。プログラムは食事を含む 3 時間程で、介護保険制度で要支援と認定された人や、認定に至らなくても国のチェックリストで一定の要件を満たした介護予備軍の人達が対象。シェア奥沢では毎週水曜日の 11 時から 15 時に開催し、歩いて通える範囲の方が利用している。以前からのつながりで先生になったり、料理が得意な人には料理を担当してもらい、つながりのできた皆さんが自分の持てる力を活かせる時間となっている。

利用者也自分の力や 時間を生かせる場に

オーナーの堀内正弘さんは、介護を必要とする高齢の母親とここで暮らしている。ただ受動的な高齢者サービスを受けるとの限界や矛盾も感じていたという。そうこうするうちにお母様の千枝子さんが車椅子で登場。「ちえこさーん、お待ちしましたよ〜」と、ご近所にお住まいの若井須磨子さん。千枝子さんも笑顔だ。昔から見知った顔の中で見守られながら、老いていくことは昔ならばこの家庭や、まちにもあった風景だが、今は誰もが忙しく困難になっているのかもしれない。そんな中で皆が少しづつ力を出しあえて助け合えるこのかたちは、心地よく老いていくヒントに満ちている。

この日のお昼のメニューは夏野菜のカレーとお味噌汁。料理担当の立山徹さんが腕をふるったごちそうは彩り豊かで優しい味だ。「ひとりで食べるよりおいしいわー」利用者の 1 人がつぶやくと「本当にねえ」と皆がうなづく。ご飯は皆で食べてこそおいしく楽しく、栄養となってみていく。それが実感されるランチタイムは、一般のカフェでは味わえない時間だ。

「5 月に始まったばかりですが、今後は利用者の方にも持てる力をここで発揮してもらえたらうれしいですね」と話す堀内さん。カナダに在住経験のある利用者のご婦人が笑顔で「see you next week」と玄関を後にした。また来週、その次もずっと楽しみにしています。背中がそう語っているようだった。利用者が力を発揮する日も近いようだ。

■DATA

所在地 奥沢 2-32-11

連絡先 03-6421-2118

活動日 HP をご覧ください <http://share-okusawa.jp/>
*facebook ページもあります

読書空間は 次なるステージへ

2 読書空間みかも 大正から引き継がれる空間



うしがみ 上神さん

大正時代の空気が流れる洋館で

自由が丘の駅からなだらかな丘を上がった住宅街。このあたり一帯は、90 年ほど前は海軍村と呼ばれ、海軍関係者が多く住んだ地域。洋間があり、当時としてはハイセンスなデザインだった。だが現在、元のままのかたちを残している建物はほとんどなくなってきている。そんな中で、みかもは庭も含めて建てられた当初のままを留めている貴重な建物だ。

オーナーの建物を残したいという想いを受けた町田恵美子さんはこの空間を「みかも」と名付け、10 年ほど地域共生のいえとして運営を担ってきた。しかしご自身の事情で運営を退かざるを得なくなった。

2016 年の 4 月から上神千波弥さんたちが引き継いだと聞き、みかもにお邪魔した。みどりが森のようにになっているお庭を眺め、玄関へ。玄関の扉の鉄のモチーフは錨と桜。海軍のマークだ。玄関を一步入るとひんやりとして静かな空気が流れている。「ようこそ〜」と上神さんが迎えてくれた。

3 年前からみかものイベントのお手伝いをしていた上神さん。「漆喰の壁の洋間でソファーにもたれて好きな本を読んでいると時間が経つのを忘れますよね」と話す。彼女もまた、この空間のファンでもある。ただ、ここの運営の悩ましい点は家賃と修繕費が発生する点だ。長い時間が経った建物は、あちこちケアが必要である。自由が丘の駅から奥



沢の駅からも徒歩 10 分圏。とても立地がよい。

今までにない年齢層が この場を知ってくれた

上神さんたちは悩んだ末、会員制度と会費をやめることにした。

これまでは会員以外は入館料を 500 円いただく、他の時間はお稽古の場として使用するという運営方法だった。しかし 10 年継続すると、会員の高齢化もあり会費を集めるのが難しくなってきた。そこで、毎日あけて 500 円の入館料をいただき、気に入ってもらった人には場所貸しをする決断をした。

その結果、「前から興味はあって入ってみたかったけど、閉まっていたので入れなかった」という人が入ってこれようになったり、読書会をやりたいという若い男性が名乗り出るなど、読書空間のファンの年齢層が広がった。風水講座や香道などで使ってみたいという人も現れ、人気の場所になりつつある。

町田さんがやってきてくれた 10 年という時間のおかげで思いがけない人が応援してくれたりもするそう。ブックカフェでもない、図書館でもない、読書空間というこの空間は本当に魅力的だと話す上神さん。活動の継続は簡単にはいかないが、寄付を募ったりしながらやれるところまでやってみたいと話す。上神さんたちの健闘に期待したい。

■DATA

所在地 奥沢 2-33-2

連絡先 03-3718-2011

活動日 HP をご覧ください <http://dokushomikamo.jimdo.com/>

最近のトピックス

活動記録冊子を制作します！

快晴の6月3日、「ぬくぬくカフェ」が始まりました！

3 椎の木 我が家で過ごすようなひと時

椎の木では、上北沢ホーム（特養）の入居者さんをお招きし、四季折々の草花果実に触れ、昔ながらの歳時行事を体験し、楽しんでいただいています。この活動は、日本大学文理学部福祉学科の先生・学生さんが引き継いできました。学生さんが天

草から作った「ところてん」を、おばあちゃんが、突いて食べる！という写真もあるので。

まちづくりファンドの助成を受け「活動記録の小冊子を制作・配布」することになりました。来年 3 月には出来上がり、同様な高齢者施設、地域共生のいえなどへ配布し、活動への何かのヒントになればと思っています。（小塚）



■DATA

所在地 桜上水 3 丁目

4 ぬくぬくハウス みんなでぬくぬく

毎週金曜日午後 1 時から 5 時まで自由に過ごしていただけるコミュニティカフェです。初日以来、デイサービスの利用者・玉川福祉作業所の通所者・近隣の方々・散歩中の立ち寄りなど多彩な方々が参加し、楽しい会話に加え、暮らしの情

報交換も飛び交います。初日 35 名。これまで 7 回開催しましたが少ない日でも 10 名の参加者を迎えています。現在は「学生インターンシップ」で 3 名の学生がお手伝い。アメリカ人留学生は、カフェで日本語を習得中。日本の歌を唄ったり、楽しい笑顔が生まれています。（宮川）



■DATA

所在地 玉川 11-2-3

連絡先 03-3707-0037

活動日 カフェ 金曜日 13:00-17:00
その他は不定期活動。HP をご覧ください <http://www.nukunuku-house.com/>

「小さな森」としてもひらいて



5

ありりんかん
在林館

木漏れ日のギャラリー



ありつか
在塚さん

庭のみどりと静かな暮らしは、 在塚家の人たちが愛した時間

京王井の頭線の東松原駅からほど近いところにある在林館。いつ訪れても庭のみどりと静かな時間が出迎えてくれる。ここはオーナーの在塚礼子さんの祖父の代から住み続けている場所だ。地域共生のいえとして毎週木曜日の午後をまちにひらいて4年が経った。

2015年11月19日にはトラストまちづくりの「小さな森」としてもひらき、12名の人が訪れた。

訪れたこの日には祖父のコレクションだという歌川国貞の浮世絵を展示。退色しやすい浮世絵のためにカーテンを引き、薄暗くして展示している。こんなところにも、ここにかつて暮らしていた人への在塚さんのリスペクトが見てとれる。

このいえのみどりもまたかつて暮らしていた祖父の代からのものが残っている。

建て替えのたびに移植しながらも、この地で根をはってきた。かつて子どものころ、庭の隅の方が小高い山のようにになっている場所があった。小さな礼子ちゃんが細道を通って山頂のヤマモミジの下に到着すると、そこに置いてある石に腰掛けるのが日課だったと話す横顔は子ども時代に戻ったようだ。在塚さんの話を聞きながら庭を眺めていると今にも小さな女の子が横切っていくような気がしてくる。在塚さんの思い出もまた、みどりとともにある。

かつて四国の讃岐にある祖父の生家を訪ねた時に、驚いたことにマツやウメ、モッコクの種類まで、東松原のいえの庭と同じだったという。家と庭に育まれて大きくなった人はやがて家を持ったり、



の時間があってもよいと思っているそう。いえをひらくこと、庭をひらくこと、どちらも在塚さんにとってはごく自然なことのようだ。在林館には常連さんもできた。特別な時間に特別な人が訪れるのではなく、道草の子どもも常連になってくれればうれしいと話す。

ゲームやスマホに囲まれた小学生がこのいえの静けさと出会うことで、素晴らしい時間が生まれてきそうな予感がする。在林館には小学生の礼子ちゃんが描いた当時の東松原商店街の絵が飾られている。道草に立ち寄った子がこの絵に会ったら、それは100年の物語の始まりかもしれない。

庭木を選ぶ時にその記憶が再現されることで、「我が家」になるのかもしれない。記憶の居場所としての在林館には、まちの記憶とともに在塚さんの過ごした時間も詰まっている。そんな在塚さんが長じて「住まい」についての研究をすることになったのも必然だったのかもしれない。

子どもが道草で訪れるような 場になっていったら

在林館へ向かう道はゆるやかな登り坂になっているため、前面道路と庭の高低差は1メートル弱ある。ちょうど子どもの背の高さだ。庭を眺めていると時おり小学校帰りの小さな頭がのぞいていることがあるという。今後はこんな子どもたちが立ち寄れる道草のような「小さな森」

の時間があってもよいと思っているそう。いえをひらくこと、庭をひらくこと、どちらも在塚さんにとってはごく自然なことのようだ。在林館には常連さんもできた。特別な時間に特別な人が訪れるのではなく、道草の子どもも常連になってくれればうれしいと話す。

ゲームやスマホに囲まれた小学生がこのいえの静けさと出会うことで、素晴らしい時間が生まれてきそうな予感がする。在林館には小学生の礼子ちゃんが描いた当時の東松原商店街の絵が飾られている。道草に立ち寄った子がこの絵に会ったら、それは100年の物語の始まりかもしれない。



果樹園
c a f e
ゆめハウス
(宮城県牡鹿郡女川町)

■一般社団法人 コミュニティスペースうみね
代表が八木純子さん。運営は有償ボランティア、学生ボランティアなど多様な人が関わる。企業からの助成や寄付など、多方面からの支えで成り立っている。

■お問い合わせ
果樹園カフェ
ゆめハウス
住所 宮城県牡鹿郡女川町
高白浜25-2
連絡先 0225-25-7486
活動日 日曜日～水曜日
11:00～15:00 木曜休
http://onagawa-umin
eko.jp/



■被災地から発信する「みんなの夢」を 実現するチカラ

JR石巻線の女川駅から車で15分ほど行くと、果樹園カフェゆめハウスのある高白浜だ。小さな入り江を望む高台にある。「おお! やっぱ海はいいなあ、ここからの眺めが最高だなあ」「だよねえ」

地元の男性と代表の八木純子さんが談笑している。6年ほど前までここは八木さんの実家の果樹園の作業小屋だった。八木さんは石巻で学習塾を営んでいた。2011年3月11日、地震と津波は、八木さんたちの日常をも全て押し流した。そしてここから今日に至るまでの八木さんの奮闘の日々が始まる。

もともと保育士である八木さんは発災直後、赤ちゃんや子どもを抱えて避難しているお母さんたちを支えるところから始まった。子どもを見ているから、お母さん1人でゆっくりお風呂に入って、と避難所で託児を始めたのが始まり。見回せば、すべてを失って生きる力をなくしているお年寄りたち。お風呂やカラオケ、お茶っこ(※)にと連れ出す活動を始める。全ては「みんなに元気でいてほしい」「みんなが出入りできる場所があればいい」そのシンプルな思いから。やがて全国から集まった古着Tシャツで母ちゃんたちが作る布草履を販売。刻々と変わるニーズを、八木さんはスポンジのように吸い取り「必要な時に」「必要なことを」着々とやってきた。

2014年4月には、現在の地に、たった一軒残った八木さんの実家の作業小屋を改修、「ゆめハウス」が完成した。地元のお母ちゃんたちが作る定食、お父さんたちが世話をしたトウガラシやイチジクを製品やデザートに使っている。人が人を呼び、今では1年間で延べ5000人が訪れる場所になった。今後の課題は活動を持続させていくこと。皆の生きがいと経営の兼ね合いだが、ここに来て「やっぱ海はいいなあ」という人がいる限り八木さんは必要とされる取り組みを続けるだろう。

(※) お茶っこ 東北地方では「ちよっとお茶でも」という時、「お茶っしょうか」と集い、お茶を飲みながら四方山話に花を咲かせます。

掲 示 板

6 あばら屋春夏の看板

しゅんか
ティースプーン一杯の気分転換



あばら屋春夏は、介護をされている方が一息つける場にと2012年3月に地域共生のいえとして開設しました。それから毎月1回、欠かさずに活動が続けています。その活動日には必ず扉に看板をかけています。初めて来た人でも目印となってどの家なのかわかりやすいように、そしてあいていますよとお伝えるため

いえ ♡ モノガコト

に。あばら屋の「屋」ですが、「家」ではひとの家にお邪魔するような印象を与えてしまうので「屋」としました。初めての方でも、どなたでも看板を目指していらしてください。(安田宏子)

■DATA
所在地 新町2-34-13
連絡先 03-3420-2649
活動日 第2火曜日 10:00-12:00

「トラまち」から 地域共生のいえは 「新しい“小さな公共空間”」

「新しい公共」という言葉があります。公共サービスを行政だけで提供するのではなく、住民やNPO、企業など様々な主体が行政との協働によって提供するという考え方です。行政だけでは限界があること、個人の価値観の多様化

や柔軟なサービスが求められている社会背景から、この考え方は広まってきました。地域共生のいえはオーナーが主体となり、公益的なまちづくり活動をする取り組みです。子どもの居場所、子育て支援、高齢者や介護者の交流の場と、オーナーの想いや地域のニーズに応じて様々な場が生み出されてきました。まさしく「新しい公共」と言えるでしょう。財団では、地域共生のいえだけではなく、空き家等地域貢献活用、まちを元気にする拠

点、小さな森、市民緑地といった住民主体の場づくりの支援を行ってきました。これらの特徴は単なるサービス提供ではなく、場があること。建物や庭・緑地・公共用地などを必要に応じて変容させ、活用している点です。そこで、これらを「新しい“小さな公共空間”」と呼んでみることにします。「公共空間」という言葉から、概して図書館や公園など大きな空間のイメージをもちますが、住民の手によって創出された“小さな”公共空間です。「新しい“小さな公共空間”」

はどのような役割を果たし、どのような可能性があるのでしょうか。フォーラムで議論したいと思います。(担当：SY)

フォーラム「住民主体の新しい“小さな公共空間”これまでとこれから」
日時 9月11日(日) 16:30-18:30 (16:10 開場)
会場 生活工房セミナールーム (世田谷区太子堂 4-1-1 キャロットタワー 5 階)
*同日開催：
空き家等地域貢献活用モデル公開審査会 13:30-16:00